

尾道と大阪 ～二つの土地を繋ぐ歴史物語～

今年3月まで放送していたNHK連続テレビ小説「てっぱん」では、尾道と大阪が舞台となっていたが、この二つの土地は「てっぱん」以前の昔から、深い交わり・繋がりを持ち、歴史的に見ても縁のある土地であった。

1874(明治7)年、地元の海運業者・竹内隼太によって、尾道 大坂(阪)間の定期航路が開設され、次いで1884(明治17)年には、大阪を発着して瀬戸内の各港を連絡する「大阪商船」の定期船が尾道へ寄港した。

同様に海事関連で地場産業の雄たる造船界を見ると、因島と向島に大きな拠点を構えた日立造船の前身は「大阪鉄工所」(本社地が大阪)と旧称し、1911(明治44)年操業開始の大阪鉄工所因島工場(後の日立造船因島工場)は、第一次大戦期の大正初期には、全国1位の造船量を誇った。

角度を変えて人物という観点から見ると、尾道に生まれ、大阪へ出て大成した実業家として、巨万の富を広く社会へ還元し続け、尾道市の上水道敷設の大恩人として、今にその遺徳を讃えられる山口玄洞(尾道市名誉市民)、農業機械・工作機械の大手企業・クボタ(クボタ鉄工)の創業者・久保田権四郎(因島大浜町出身、尾道市名誉市民)、久保田権四郎に見込まれて、後にクボタ3代目社長に就任する小田原大造(向東町出身)の3氏がいる。

更に歴史的に深みのあるエピソードとして、住友銀行(本社・大阪市)が銀行業への参入を決めた地が、何とどこ尾道であったという知られざる逸話もある。

商港尾道の歴史の中で外せない北前船も、その起点は大阪であり、大阪から瀬戸内の商港を経由して山陰・北国地方を往来している。

天下の台所として商業・物流の一大中心地であった大阪と、大阪規模には遠く及ばないものの、同様に商都としてその名を知られた尾道が繋がる余地は、経済的・物流的観点で見れば、至極当然の帰結といえるだろう。

古寺の林立から、尾道を俗に「西の京都」と称す向きがあるが、「政治は広島、経済は尾道」と言わしめた商港都尾道は、「西の大阪」と呼べるだけの存在であったと見るのも、言い過ぎにはなるまい。

竹内隼太 ～尾道 - 大阪間に蒸気船航路を開いた男～

隼太は、享保年間（1716～36）の頃より尾道で製塩業を営んでいた竹内家の養子で、生まれは美作の国、岡山県勝山町であった。隼太の代より土堂海岸通り、現在の広島銀行尾道支店裏辺り（築出町）で海運業を営み、屋号を林屋といった。

幕末には国学に触れて、尊皇攘夷派の立場をとって勤王の志士と深く交わり、軍費の調達のほか実戦にも参加している。

維新後の1874（明治7）年、蒸気船（船名・八島丸）を一隻購入して尾道 - 大坂間に定期航路（毎月1、3、6、8日の運航）を開いた。しかし、航路経営は思う様にいかず、数年間で廃止となってしまった。この痛手により家は傾き、その後の家業を息子の要助に譲り、1878（明治11）年尾道を去った。

各地を転々とする流浪の旅の果てに栃木県に奉職し、以来、日光の二荒山神社や東照宮に仕え、伊勢神宮にも勤める。

尾道で家業を継いだ要助は、一種の精神の病を患っていたらしく、必然的に経営は行き詰まり、没落するに至った。隼太はそれを哀れんでか、1903（明治36）年9月14日、播磨灘（兵庫県沖）に身を投じてその数奇な生涯を閉じた。享年72歳。西久保町、愛宕祖霊殿の神道墓地に眠る。遺体が発見されなかったために愛用していた硯が納められている。隼太以前の竹内家の古い墓所は東土堂町の信行寺（浄土宗）にある。



あたご それいでん
愛宕祖霊殿の墓碑

航路が繋ぐ尾道と大阪

大阪商船 ～ 絵葉書に見る大阪商船の雄姿～

大阪商船は、1884（明治17）年、住友家の初代総理人・広瀬宰平を創立委員長として、参加船主55名、所有船舶93隻、資本金120万円によって設立された有限会社大阪商船会社（OSK）による定期船で、瀬戸内の各港を結ぶ幹線の連絡船として就航し、後には、大阪から朝鮮、上海、天津、大連、バンコク、インド、フィリピン、アフリカ、オーストラリア、ニューヨークとも海外航路が開かれた。

第11本線の「大阪尾道線」は、大阪港から神戸・岡山・小豆島と周り、四国へ渡って高松・丸亀・多度津、そこから鞆を經由して尾道港へ入った。当初は多度津を終点とする便と二通りあったが、最終的には尾道港終点で一本化され、運航は不定期ではなく毎日であった。

翌1885（明治18）年5月、大阪尾道線は航路が重なる第10本線「大阪広島線」（大阪 - 神戸 - 高松 - 丸亀 - 多度津 - 鞆 - 尾道 - 竹原 - 音戸 - 広島、後に「大阪岡山線」に改称）へ統合される。

この他、第3支線として、広島 - 宮島 - 新湊（山口） - 三津浜（松山） - 堀江（松山） - 今治 - 尾道 - 広島を航行する「広島尾道線」、「尾道門司線」（後に「徳山門司線」に改称）、「尾道別府線」なども見られたが、この内、「広島尾道線」は不採算航路となり、わずか7ヵ月程の短い期間で姿を消した。

大阪商船発着の港は住吉浜に位置する中央棧橋で、大阪商船寄港から「商船棧橋」と呼称された。大阪商船の荷客（運送する荷物・旅客）取扱いは、大阪尾道線を土堂町西濱（住吉浜）の豊田回漕店、尾道別府線を同町の西濱回漕店がそれぞれ担った。

1929（昭和4）年の『尾道市産業要覧』（尾道市勸業課）記載の汽船発着時刻表によると、上り阪神行が午後2時尾道発で、鞆 - 多度津 - 高松 - 坂出 - 神戸を經由して同6時に大阪着とあり、大井川丸、早鞆丸、愛媛丸などの汽船名が記される。

大阪商船会社（明治26年より大阪商船株式会社）は、1964（昭和39）年に三井船舶（三井物産船舶部）と合併して大阪商船三井船舶株式会社となり、1999（平成11）年より株式会社商船三井と改称して今に至る。

絵葉書に見る大阪商船定期船の雄姿（尾道学研究会蔵）

【明治後期（棧橋落成記念）～昭和初期の時代範囲】



停泊中の中国航路大井川丸



中央棧橋へ停留中の定期船



大阪商船尾道棧橋落成記念絵葉書



中央棧橋へ停留中の定期船



尾道別府線使用吉井丸



大阪へ向けて棧橋を出航する定期船

造船が繋ぐ尾道と大阪

大阪鉄工所因島工場 ~ 大正期には国内シェア第1位 ~

造船の島・因島に、大阪から進出して来た大資本の造船所が、後に日立造船因島工場へと繋がる大阪鉄工所である。

大阪鉄工所は、イギリス人実業家・エドワード・ハズレット・ハンター（1843 - 1917）が1884（明治14）年に大阪の安治川岸（大阪市西区）に設立した造船所で、三菱造船、川崎造船に次ぐ日本三大造船所にまで成長、発展を遂げ、1936（昭和11）年に日立製作所の傘下に入り、1943（昭和18）年に現行の日立造船に社名を変更した。

1911（明治44）年、因島最古の造船所で閉鎖中であった土生町の因島船渠【旧・土生船渠・1896（明治29）年創業】を9万7000円で買収し、大阪鉄工所因島工場がここに開設・操業する。

操業間なしから、その資本力をもって工場を順次拡張して行き、造船ブームの波が訪れた第一次世界大戦【1914（大正3）年開戦】の時期には、大阪鉄工所因島工場の造船量が全国第一位を誇った。因みに大正期には、大阪商船も経営に一時参画した。

大戦後は反動による不況で、今度は工場の規模縮小・整理が図られ、工場の合併や船台の一部廃止などが着手された。その後、本社主導によって新造船部門が大阪の桜島工場に一本化され、因島工場は修繕部門のみとなったが、満州事変～太平洋戦争の勃発によって再び新造船部門を再開させた。

戦時下（太平洋戦争）には、軍需工場として米軍の攻撃対象となり（因島空襲）、多くの施設が破壊され、また同様に多くの人命が奪われた暗い過去を持つ。

戦後はたくましく復興を遂げ、造船の島を代表する造船所として活況を呈し、1968（昭和43）年2月27日、多目的船ヤコブ・マルム口号（9万トン）の進水により、通算の進水量が500万重量トンを突破し、記念の祝賀式典も盛大に挙行された。

銀行が繋ぐ尾道と大阪

住友銀行 ～住友家の銀行業参入を決めた地～

その昔、尾道経済の繁栄ぶりを象徴する様に、尾道の旧市街地では、他の地域比べて比較的狭い範囲に多くの銀行があった。消えた銀行を含めれば、その数は現在をはるかに上回り、「政治は広島、経済は尾道」と言わしめた商都尾道のありし日の姿が偲ばれる。

その多くは地方銀行で占められるが、中でも唯一の都市銀行である住友銀行（現・三井住友銀行、当時の本店は大阪市）の存在は、広島より先んじて開設された国立第六十六銀行（通称・ロクロク銀行、明治11年創業）と並んで、特筆される歴史的背景を秘めている。

『住友銀行三十年史』（大正15年、株式会社住友銀行発行）によって尾道との縁を辿って見ると、山陽鉄道（現・JR山陽本線）の尾道開通と時を同じくする1892（明治25）年2月、住友家の経営する別子銅山（愛媛県新居浜市）の用度品調達及び並合業（自己資金による物品抵当の金融事業）を担う住友家尾道分店が開設される。現在の三井住友銀行尾道支店に所在し、その南側には住友棧橋が設けられ、同家が運航する貨客船が尾道と大阪、新居浜、四阪島（新居浜沖にある島で住友金属鉱山が全島を所有）を往来していた。

それから3年後の1895（明治28）年5月4日、5日の両日、住友家は並合業から近代化した金融事業としての銀行業への参入を重役会議で諮った。その会議の地こそが、ここ尾道であった。

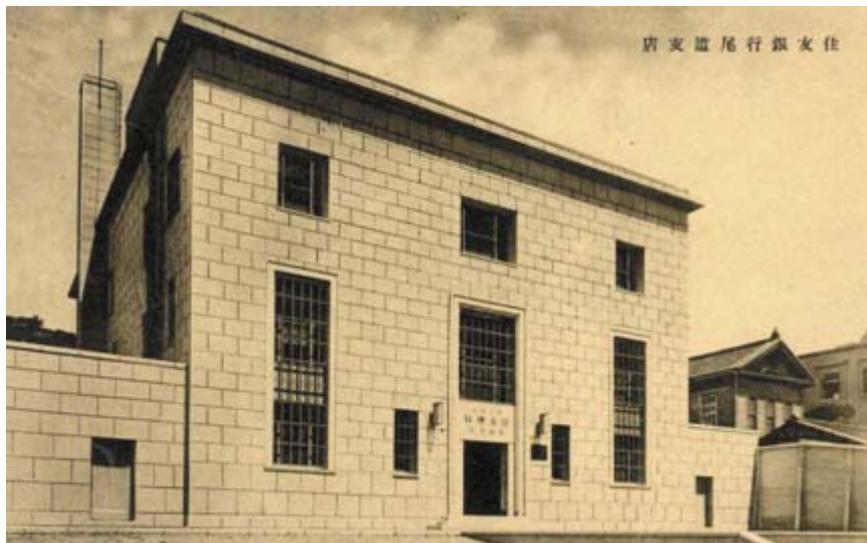
住友銀行開設がこれによって決議されると、大阪の本店に次いで先ず神戸支店が開設され、出張所を除くと次いで尾道支店が同年の12月1日、現在地に開設された（出張所を含む全体では全国で5番目）。

日露戦争開戦の1904（明治37）年2月には土堂町から久保町（米場町）へと移転、1938（昭和13）年8月に再び現在地で店舗新築し、今日に至っている。

往時の住友銀行尾道支店



米場町時代 / 昭和 10 年 / 後に海運局の建物となり、現在は市の建物
(創立四十周年写真帖より)【尾道学研究会蔵】



現在地 / 昭和 13 年 / 海岸側からの外観、東隣に警察署、次いで商議所と並ぶ
(新築記念絵葉書)【尾道学研究会蔵】